

SPOTLIGHT

Leadership Eco System®

#2 西村 恵

2024年度あしなが育英会「つどい」議長団



西村 恵 (にしむら めぐみ)

中学生の時、父が他界。家庭の事情から進学に悩んでいた際、在住県内に芸術観光文化を学ぶ公立大学が開校。かねてより心の支えとしていた演劇を学べる機会を求めて進学。2021年よりあしなが学生募金事務局での活動に参加。2024年学生リーダー代表議長団として「関西のつどい」（高校生向けの支援プログラム）をリードした。2025年に就職。

困難な状況に立ち向かっている若者を支援する「[Leadership Eco System®](#)」。そのインターンシッププログラムBACKSTAGEに参加し、現在社会人2年目を迎えた西村恵さんにお話を聞いた。

「社会人って、楽しそう。その喜びや誇りを強く感じ、働くことへの捉え方が大きく変わった」。インターン経験を振り返り西村さんはそう微笑む。

高校時代、進路を決めるタイミングで県内の芸術系公立大学の1期生募集が始まった。演劇の街づくりというコンセプトに惹かれ入学。しかし希望を抱き臨んだ新生活でコロナ禍に見舞われた。それでも「街全体が学生を見守ってくれていると感じていた。大学ができてよかったと思ってほしかった」。前例がなく自分たちで何でも造り出せる環境を活かし、学生時代は舞台芸術の勉強と舞台創作活動に没頭した。また進学を支えたあしなが街頭募金の活動や、高校生向け「つどい」の議長団に立候補するなど、様々な活動に積極的に取り組んだ。短期長期あわせて5つのインターンシップにも参加したという。

一方で、いつからか働くとは自由とのトレードオフだと感じるようになっていた。「演劇を続けたいなら、お金はバイトで稼ぐ。その元手で自分のやりたい舞台をやる。働くこととやりたいことは別」。これまでもらってきた『学生の内に思いきりやりたいことやりなよ』とのアドバイスからも、社会人はやりたいことができないというニュアンスを受けとっていた。

しかし、その認識が変わったのが impact のインターンシップ。そこで目の当たりにしたビジネスパーソンの方々の姿からだった。「皆さん、生き活きと仕事の話をされていた」。オブザーブした[リーダーシップ公開プログラム](#)では、組織で働く苦悩や葛藤も吐露されていた。その姿すら、西村さんには仕事に対する誇りの現れだと感じたという。

特に「責任」の捉え方に変化が起きた。プログラム内のいくつかのプロジェクト（課題解決シミュレーション）で、参加者から「ここは自分が責任取るから、やってみよう！」との働きかけが起こった。その決断がチームに勢いをもたらし、成果が生まれるシーンをいくつも見たと言う。「それまでは責任、裁量に対して漠然とした怖さがあった。でも『責任が取れるとは、できることの広がりと同義なんだ』とスッと腑に落ちた」。

また、プログラムの中で紹介されていた一部のフレームワークを実際に舞台の制作過程で使ってみた。「役者、演出、振付など様々な役割が関わり、形作っていくのが舞台。意思疎通はとても大切。4つのカラーエナジーという考えに基づく伝え方を実践してみたところ、驚くほどよく伝わるようになった」。時間をかけて仲間とひとつのものを創り上げていく。そこにはやりがいと同時に、多くの摩擦も生じる。その面白さについて尋ねると「一見うまくいかなそうなことが、自分が働きかけた結果、うまくいった時は本当にうれしい」と微笑む。

社会人となった彼女は、日本国内テーマパークのステージマネージャーとしてショー運営を支えている。その日々は意思決定の積み重ねだという。「天候や混雑具合など、いくつもの変数がある。この日を楽しみに来てくれたみなさんに安全に楽しんでいただくため、ショーの実施や内容などについてベストな判断をする」。また社会人2年目となった今年、慣れ親しんだステージから異なる形態のステージ担当へと異動。それに伴い劇場キャパシティや出演者、関係者も変わった。役割も雇用形態も社歴も異なる仲間を束ね、2年目の社員である自分が臨機応変に判断を行っていく。西村さんはその状況をも「自分の責任で楽しんでもらえる範囲が広がっている」と捉えている。

日々の意志決定の質を支えるのは、周囲からのフィードバックだ。ショーの後、音響や照明はじめ各プロフェッショナル観点からの振り返りを必ず聞きに行く。「考えを明確に伝える。そうすると相手からも『だとしたらこの選択肢もあったのでは』と具体的な意見やアドバイスがもらえる。そのやり取りの積み重ねが次の判断を支える」。そのプロアクティブな姿勢は、相手からの信頼獲得にもつながっている。過去担当したショーの仲間へ会えば「いつ戻ってくるの？」と声をかけられるという。

今後目指すのは「あの人がいれば大丈夫」と厚い信頼を集めるステージマネージャーだ。例えば日々の運営やイレギュラー対応時に強い求心力を発揮している諸先輩方。その背中を追いながら、将来的には新しいショーの立ち上げなどに関わっていきたくないと話す。また過去の自分や後輩には「やりたいことを追求するのはわがままじゃない。責任を持つことも怖いだけじゃない。責任を果たすため、周囲の人を頼り試行錯誤する。それが次のやりたいことの実現につながっていくから大丈夫」。そう伝えたいと話す彼女の表情は輝きに満ちていた。